

令和7年度

第1回本巢市総合教育会議議事録

(令和7年7月15日)

本巢市教育委員会

第 1 回 本 巢 市 総 合 教 育 会 議 議 事 録

- 1 開 会 令和7年7月15日(火) 午前10時00分
- 2 閉 会 令和7年7月15日(火) 午後0時10分
- 3 会議場所 市役所本庁舎 3階 大会議室
- 4 出席又は欠席した構成員

(1) 出席構成員

市 長 藤原 勉
副 市 長 谷口 博文
教 育 長 川治 秀輝
教育委員 小澤 明年
教育委員 黒田 隆吉
教育委員 松浦 尚美
教育委員 藤木 節子

(2) 欠席構成員

なし

- 5 説明のため出席した者の職氏名

市 長 部 局	総 務 部 長	村澤 勲
教育委員会事務局	事 務 局 長	
	兼教育総務課長	高木 孝人
	参事兼学校教育課長	薄田 茂樹
	参事兼社会教育課長	野原 徹二
	幼児教育課長	脇田 純一
	学校教育課主幹	新井 恒雄
	幼児教育課主幹	登尾 裕美
	本巢小学校長	岡田 英隆
	本巢小学校教諭	加藤 克己
	外山小学校長	長沼 有希子
	外山小学校教諭	廣瀬 功二
	弾正小学校長	山口 真理子
	弾正小学校教諭	遠山 知美
	真桑小学校長	池田 勉
	真桑小学校教諭	高橋 真美
	席田小学校教頭	高橋 雅博
	席田小学校教諭	堀部 仁大
	土貴野小学校長	長屋 和宏

土貴野小学校教諭	中田 心
一色小学校長	野々村 元
一色小学校教諭	安部 智子
本巣中学校長	岩井 隆史
本巣中学校教諭	太田 美可子
真正中学校長	川瀬 貴子
真正中学校教諭	山田 陸生
真正中学校教諭	清水 憲伸
糸貫中学校長	安藤 貴広
糸貫中学校教諭	吉田 道央
糸貫中学校教諭	高垣 恵理奈
根尾学園校長	安江 政利
根尾学園教諭	西家 絢子
本巣幼児園	堀内 寿幸
神海幼児園	山田 和浩
糸貫東幼児園	丹羽 美彦
真正幼児園	清水 康孝
真桑幼児園	堀江 秀樹
弾正幼児園	岩井 隆司
根尾幼児園	松村 庸子
教育総務課総括課長補佐	小林 恵美

6 協議事項

「本巣市こどもの権利条例」の実現

～「子どもを主語」にしたみんなの学校を実現するために～

- (1) 各学校の実践発表
- (2) 熟議セッション
- (3) 木村泰子先生の講評

7 その他

開会 午前10時00分

- 薄田課長 : 開会の宣言。市長にあいさつを求めた。
- 藤原市長 : あいさつの中で、「子どもが主語」の学校づくりを強調。全国的にも珍しい権利条例をいかに具体化し、教職員と子どもが一体となって「自分たちのもの」にしていくか、各校の議論と実践を期待する旨について話をした。
- 薄田課長 : 令和6年4月に施行された「本巣市こどもの権利条例」を受け、各校がどのように「子どもが主語」となる学校改革を進めているかの学校の取り組みについて市内全小中義学校長へ順番に説明を求めた。
- 各小中義学校長 : プレゼンにて説明した。
- 薄田課長 : それぞれの学校の説明を聞き、3つのグループに分かれ、「気づき」、「学び」、「質問」、「疑問」など自由に出し合い、対話を深め、「子どもを主語」にしたみんなの学校をどう実現するか熟議セッションを行うよう進行した。
- 各幼小中義学校 : 熟議セッション
- 関係者
- 薄田課長 : 教育長にあいさつ、まとめの言葉を求めた。
- 川治教育長 : あいさつ、まとめの言葉の中で本巣市総合教育会議を通じて3つの大きな柱について総括がなされた。①「素直な学び」と「校長の主役性」プレゼンを通じ、校長一人一人が主役となって「こどもの権利条例」をどう経営に活かすかを語る姿に深い感銘を受けた。ベテラン・若手を問わず、互いのプレゼンを聞き、アドバイスし合う機会は本来希少であり、非常に価値のある学びの時間であった。②「学校と意識の変容」条例を中心とした取り組みにより、子どもたちだけでなく、教職員の意識や教育観にも確かな変化（兆し）が表れている。特に対話の質において、単なるやり取りではなく「他者の考えに自分の考えをぶつけ、上乘せする」という真の対話のノウハウを今後の学校経営に活かしてほしい。「校長が変わらなければ学校は変わらない」という結論を改めて強調した。③「子どもを主役にする覚悟」子どもを本当の意味で信頼し、任せることで、教職員の不安は解消される。「失敗してもやり直せばいい」という寛容な姿勢が重要である。「先生自身が幸せになる」ための条例活用を目指してほしい。今後は、学校

内での取り組みや映像を、保護者や地域住民へ積極的に発信していくことを要望した。

薄田課長 : 木村泰子先生に講評をお願いした。

木村泰子氏 : 本日の研修内容を受け、外部講師の視点から指摘がなされた。
①「校長による自己プレゼンの意義」校長自らが自己をプレゼンする試みは全国的にも極めて稀であり、その姿勢自体が価値あるものである。学校間の競争や格差ではなく、それぞれの地域や生徒の実態に合わせた「違い」をリスペクトし合う環境が重要である。②「指導」からの脱却と「見守り」子どもを主役にするためには、従来の「指導」という概念を捨てる勇気が必要である。「指導」を手放したとき初めて、子ども自らが育つ姿をフラットに見ることが可能になる。③「職員室から広がる学びの環境」研修の対話で見られた「本音を吐露し、そこから学びを整理する姿」こそが真の学びである。この研修で作りに出した対話の環境をそのまま自校の職員室へ持ち帰り、それが教室の子どもたちへと波及していく循環を作ってほしい。

薄田課長 : 閉会を告げた。

閉会 午後0時10分